総力戦と大英帝国の対応
－オーストラリアを中心に－

デヴィット・ホーナー

太平洋戦争の歴史の中で大英帝国は微妙な位置を占めている。当初、帝国は戦争で大きな役割を果たすものと見られていたかもしれない。何しろ、第二次世界大戦勃発時、5 億人の臣民を有していた大英帝国は、地球上の陸地総面積の 4 分の 1 を占める世界の超大国であった。アジア太平洋地域では、イギリスはインド、ビルマ、マラヤ、シンガポール、イギリス領ボルネオ、香港、中部および南太平洋の小さな島々を植民地として支配していた。オーストラリアおよびニュージーランドはイギリスの自治領で、太平洋に極めて重要な利害関係を有していた。他方、カナダは太平洋に面する長大な海岸線を有していた。明らかに、大英帝国は太平洋でのいかなる紛争においてもメインの主役であって当然であった。

しかし、太平洋戦争勃発からわずか半年で、大英帝国はほとんど戦場から姿を消した。1 年半後、大英帝国が太平洋戦争に影響力を再び確立したとき、その努力はほとんど、アメリカの影響力の陰にかくれて意味を失くしてしまっていた。それではどうやってイギリスおよびその帝国は戦後の太平洋で、ある種の地位を再確立できたのであろうか。筆者はこの重要な問題を探求しようと思う。しかし、まず、大英帝国が複数の異なる部分からなることに留意する必要があろう[1]。大英帝国の一部はイギリスが直接支配または統治する植民地が構成していた。最大で、最も価値のある植民地はインドであった。インドはたいへん強力な軍隊を保有していたが、その将校は主にイギリス人であった。帝国には保護領もあり、そこでは通常、イギリスが国際問題を処理した。自治領であるオーストラリア、カナダ、ニュージーランド、南アフリカ、そして、特殊なケースであるアイルランドは、自治を行う帝国の一員であった。厳密には、それらはイギリス連邦として知られる連合体の一員であった。それらが保有する軍隊は独自の政府の許可がなければ展開することができなかった。しかし、自治領は自らを依然として大英帝国の一部としてみなしており、戦争中、それらの軍隊は通常、イギリスの戦略方針に基づいて行動した。主たる例外は、1942 年以降のオーストラリア軍の方針であった。

第二次世界大戦前、イギリスはアジア太平洋地域の帝国を防衛する準備が十分にできなかった。一つには、第一次世界大戦で疲弊したイギリスには、もはや全世界に軍隊を

[1] 戦争中の帝国に関する良好な概説書として、Ashley Jackson, *The British Empire and the Second World War* (London: Hambledon Continuum, 2006)を参照。

展開する能力がなかったためである。極東での防衛はいわゆるシンガポール戦略を中心に築かれた。イギリスは大海軍基地をシンガポールに建設し始めた。極東の脅威に際しては、イギリスはそこに向けて大艦隊を送り込むつもりであった。この戦略にはいくつかの弱点があった。第一に、唯一、イギリスがヨーロッパに気を取られているときに、日本が攻撃を仕掛けてくる可能性があった。そうした場合、イギリスはシンガポールに海軍力を割くことが困難であった。これは実際に起きたことである。イギリスがヨーロッパで深みにはまるや、日本は攻撃を仕掛けてきた。第二に、シンガポールは陸上からの攻撃に対して脆弱であった。従って、イギリスは十分な戦力をマラヤ半島部を防衛するために展開する必要があった。しかし、ヨーロッパで戦争が勃発したことによって、イギリスはマラヤ防衛の優先順位を低くした。マラヤを防御する必要性に気いたオーストリアは、1 個師団の最精鋭をマラヤへ派遣したが、それ以上は派遣することができなかった。なぜなら、すでに中東でイギリスを支援するために、3 個師団を派遣していたからである。

大英帝国が太平洋戦争で何をしたかを検討する前に、我々は連合国の大まかな戦略が 1941 年 2 月、ワシントンでの会議で決定されたことを思い出す必要がある。このときイギリスとアメリカは、日本とアメリカが戦争に突入した場合、連合国は先にヒトラーを打倒することに注力すると合意した。太平洋戦争勃発後、イギリス首相ウィンストン・チャーチルとアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトはワシントンで会談し、この戦略を確認した。しかし、少なくとも連合国の二つの主要な行為主体がこの戦略に同意していなかった。真珠湾攻撃で苦杯をなめさせられたアメリカ海軍はその努力を太平洋に集中することを欲した。もう一方はオーストラリアであった。オーストラリアはこの戦略について相談されておらず、当然ながら、北から接近する日本軍に対して、その主たる軍事努力を太平洋に注がなければならないとして譲らなかった[2]。

我々皆が知っているように、1941 年 12 月から 42 年 3 月までの間、日本軍は史上最も成功した軍事作戦の一つを遂行した。真珠湾およびフィリピンへの攻撃と合わせて、日本はマラヤに侵攻して、南へ進軍した。東南アジアの連合国はサー・アーチボールド・ウェイヴェル将軍のもと、アメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリア（ABDA）司令部の隷下にあったが、猛攻を食い止めることはほとんど不可能であった。42 年 2 月 15 日、シンガポールは陥落した。チャーチルによれば、「イギリスの歴史において最

[2] 太平洋における連合国の戦略については膨大な量の文献が存在するが、今では古くなってしまっているが、有用な文献目録として、Jeffrey G. Barlowe, “American and Allied Strategy and Campaigns in the Pacific War, 1941-1945”, in Lloyd E. Lee, (ed.), *World War II in Asia and the Pacific and the War's Aftermath, with General Themes: A Handbook of Literature and Research* (Wesport Conn: Greenwood Press, 1998)を参照。

悪の惨劇、最大の降伏」であった[3]。それはアジアにおけるイギリスの威信を打ち砕いた。そして、このことは、威信が帝国支配にとって死活的な支えであった点に鑑みて、重要であった。他方、日本軍は香港も攻撃し、攻略している。イギリス軍とインド軍の守備隊にはカナダ軍 2 個大隊が所属していた。それはカナダによる太平洋戦争への唯一の貢献であった。また、イギリス海軍は「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レパルス」を含む多くを 41 年 12 月 10 日に失った。42 年 5 月までにイギリス軍はビルマから敗走し、ボルネオの植民地は陥落し、日本軍はオランダ領東インド、アメリカ統治下のフィリピンおよびニューギニアの北岸を占領した。

日本はあらゆる機会をとらえて、イギリス、さらには、オランダとアメリカの旧植民地の住民に、日本は彼らがヨーロッパ人の支配から脱する手伝いをしたことを思い出させた。ほどなく、それらの地域の住民には、日本人がさらにいっそう専制的な支配者であることがわかったが、独立を目指す考えは失われず、さらなる紛争がなかったわけでもないが、独立は、戦後、見事に達成された。

1942 年中頃までに、少なくとも一時的にイギリスは太平洋戦争から事実上、放り出された。しかし、帝国の一部、すなわちオーストラリアは、依然として、しっかり戦いの中にとどまっていた。太平洋戦争におけるオーストラリアの役割は、その国の大きさに鑑みて、全く不釣り合いであった。39 年のオーストラリアの人口はちょうど 700 万人で、その産業基盤は脆弱であった。第一次世界大戦で、オーストラリアは多数の部隊をヨーロッパ戦線に派遣したが、本土が脅威にさらされることはなかった。同様に、オーストラリアは第二次世界大戦の初期にも、中東で戦うために部隊を派遣した。太平洋戦争の勃発と初期の数ヶ月間は、大きな衝撃となってオーストラリアを見舞った。オーストラリアはシンガポールとジャワ、チモール、アンボンおよびラバウルの陥落で正規の歩兵師団 1 個以上に相当する戦力を失っただけではなく、42 年 3 月から 4 月頃までに、日本が侵攻の準備をしながら、間近に迫っていた。イギリスには介入する余裕がなく、アメリカの支援は当初、乏しかった。事実、アメリカはオーストラリアのために同自治領を防衛することには関心なく、将来の作戦基地としてオーストラリアを防衛し、強化することに関心があった。

ここ数年、1942 年に日本が実際にオーストラリアに侵攻しようとしていたかどうかについて、熱心ではあるが不毛とも言える議論が交わされている[4]。その議論は、日本がオ

---

[3] Winston S. Churchill, *The Second World War, Volume IV, The Hinge of Fate* (London: Cassell, 1951), p. 81. シンガポール陥落については無数の書籍があるが、近年刊行された有用な文献は、Brian Farrell, *The Defence and Fall of Singapore, 1940-1942* (Stroud, Gloucesteshire: Tempus, 2005 である。

[4] オーストラリアへの脅威は切迫していたという議論については、Bob Wurth, *1942 Australia's*

ーストラリア侵攻を計画していなかったとすることは、とりもなおさずオーストラリアの軍事的功績と犠牲を誹謗することであるというような主張を巡って構築されてきた。真実はどうであったかと言うと、日本はそのときオーストラリアへの侵攻は意図していなかったが、オーストラリアとアメリカを分断しようとしていたのである。そうすることによって、連合国の反攻のための基地にならないようにしようと考えていた。オーストラリアの指導層は、当時はこのことがわからず、侵攻の脅威が現実的であるかのように振る舞ったのもうなずける。結局、日本はダーウィン市北部を空爆し、ニューギニアのオーストラリアが統治していた地域に侵攻した。また、短期間ではあったが、潜水艦をシドニー湾に送り、さらには、オーストラリア領パプアに部隊を上陸させている。オーストラリア軍の多くは依然として中東にとどまっていた。民兵は動員されたばかりで、海軍と空軍は弱小であった。オーストラリアの侵攻への抵抗力は実に乏しかった。

オーストラリアにとって、太平洋戦争は確かに総力戦であった。第二次世界大戦の初期、オーストラリアは 4 個師団を編成して、海外に派遣した。3 個師団を中東に、1 個師団をマラヤとその周辺の島々に送っていた。オーストラリア人航空兵が多数、訓練され、イギリスで勤務していた。海軍の大部分はイギリスの命令で行動していた。

太平洋での戦争が勃発すると、オーストラリア政府は総力戦対策を講じた。オーストラリア民兵は常勤となった。中東のオーストラリア部隊の大半は、その艦艇とともに母国へ戻った。その間、空軍はさらなる拡張を続けた。1942 年中頃までに、オーストラリア軍は 12 個師団をオーストラリアおよびニューギニアに展開した。それらはオーストラリアの防衛に直接、使用できるものであった。そのほか、セイロンに 1 個師団および中東に 1 個師団を展開した。第二次世界大戦中、オーストラリア軍の兵力は最大 54 万人を数え、同戦争の全期間を通して、73 万 5781 人のオーストラリア人が軍務に就いた[5]。空軍は 18 万人に達し、飛行中隊は 48 個を数えた。約 700 万人の人口から約 100 万人（7 分の 1）のオーストラリア人が、戦争中、軍服を着た。1943 年初め、全オーストラリア軍は太平洋戦域に投入された。もちろんそれは、オーストラリア自体が太平洋戦域の中に位置していたからである。

これと比較して、太平洋戦争勃発時にアメリカの人口は 1 億 4100 万人であった。1945 年 4 月までに、アメリカ陸軍は 145 万人の兵士を太平洋地域および中国＝ビルマ＝インド戦線に展開した。確かに、アメリカは他の戦域に 450 万人の兵士を、加えて、海軍と

Greatest Peril (Sydney: Macmillan, 2008)を、反対の見方については、Peter Stanley, *Invading Australia: Japan and the Battle for Australia, 1942* (Camberwell, Vic: Viking, 2008)を参照。

[5] *Official Year Book of the Commonwealth of Australia, No 37, 1946 and 1947* (Canberra: Commonwealth Government Printer, 1949), p. 1150. オーストラリアの統計については、より一般的なものとして Joan Beaumont, *Australian Defence: Sources and Statistics* (Melbourne: Oxford University Press, 2001)を参照。

航空部隊を大規模に展開していた。単純統計で、アメリカはオーストラリアの 20 倍の人口を有していたが、太平洋に派遣されたアメリカ陸軍はオーストラリア陸軍の約 3 倍であった。

この軍事的関与の最盛期に、オーストラリア政府は労働力管理を導入した。これは労働者を特定の戦争関連産業に強制的に組み込むものであった。配給制は戦争初期に導入されていたが、さらに強化された。女性は陸海空軍で任務に就き、工場での労働に徴収された。オーストラリアは急速な工業化を経験した。終戦まで、オーストラリアの工場では様々な銃、弾薬、車両が生産され、あらゆるタイプの航空機 3500 機が製造された。造船所ではコルベット艦 60 隻、フリゲート艦 14 隻および駆逐艦 3 隻が建造された。

ABDA 司令部解散後の 1942 年 3 月、連合国は太平洋戦域に二つの司令部を設置した。チェスター・ニミッツ（Chester Nimitz）提督率いる太平洋方面司令部（ハワイ）とダグラス・マッカーサー将軍率いる南西太平洋方面司令部（オーストラリア）である。太平洋での高位の戦略は連合参謀本部、すなわち、イギリス参謀本部とアメリカ統合参謀本部が合同で決定した。次いで、連合参謀本部は細かな統制をアメリカ統合参謀本部に下請けに出した。オーストラリア、カナダ、中国、オランダなど他の連合国は、意思決定から閉め出されていると考えていた。その対応として、より高位の命令が発する太平洋戦争理事会が設置された。しかし、太平洋戦争理事会にはほとんど影響力がなかった。意思決定権はあくまでも連合参謀本部が握っていたのである。

こうした影響の欠如は、特にオーストラリアにとって重要であった。実際、オーストラリアは太平洋戦争で重要な役割を演じていた[6]。南西太平洋方面にはヨーロッパおよび中東で従事している部隊以外のすべてのオーストラリア軍部隊がかかわっていた。オーストラリア軍はマッカーサーの陸上部隊の大部分を構成していた。先述のように、1942 年中頃に、マッカーサーがアメリカ陸軍師団 2 個を有していたのに対し、オーストラリア軍は南西太平洋方面で 12 個師団を有していた。

1942 年中頃から 43 年末にかけて、太平洋戦争の主要な戦闘のほとんどは南および南西太平洋で行われた。主たる例外は 42 年 6 月のミッドウェー海戦であった。最初に連合国は日本の前進を 42 年末にガダルカナルとパプアで止めた。次いでソロモン諸島およびニューギニアから反攻を開始した。ガダルカナル戦では海と陸で大規模な戦闘が繰り広げられたが、それらはイギリスの植民地であったソロモン諸島とその周辺で行われた。戦闘を担ったのは主としてアメリカ軍であった。しかし、オーストラリア軍の存在なくしては、マッカーサーはニューギニアでの戦闘を行うことはできなかったであろう。

---

[6] 連合国の戦略にオーストラリアが影響を及ぼそうと努めたことについては、D. M. Horner, *High Command: Australia and Allied Strategy 1939-1945* (Canberra and George Allen & Unwin, Sydney: Australian War Memorial, 1982)を参照。

42 年にパプアにおいて日本の先遣隊を破った最初の作戦行動で、オーストラリアは歩兵師団 3 個を展開したが、アメリカは 1 個師団であった。そして、43 年、オーストラリア軍 5 個師団が大規模な攻勢を仕掛けて日本軍をニューギニア東部の大半から掃討した。このように、オーストラリアの貢献によって、大英帝国は太平洋戦争の主要な戦域で、極めて重要なときに、重要な役割を果たした。

しかし、オーストラリアはこの人的投入資源のレベルを維持することができなかった。1944 年初めまでに、太平洋戦域で作戦可能なオーストラリア陸軍は 8 個師団に縮小された。それはマッカーサーが有していた戦力とほぼ同じであった。44 年の第三四半期までに、マッカーサーはアメリカ陸軍 18 個師団を有していた[7]。確かに、アメリカ海軍と航空部隊はオーストラリア軍と比較すると遙かに大規模であったが、それにもかかわらず、オーストラリア軍は作戦で実質的に貢献したのである。

1942 年から 43 年にかけて、オーストラリア軍は厳しい戦いを強いられては勝利を重ねたが、英印軍はインドとビルマの境界に沿ったアラカン山系で日本軍に再び敗れた。日本軍と対戦する前に、英印軍はたいへんな努力を払って拡大し、再訓練されなければならなかった。

1943 年 10 月、東南アジア連合司令部が提督ルイス・マウントバッテン卿のもと、セイロンに設置された。マウントバッテンの任務は日本に圧力をかけて戦力を太平洋戦域から移動させ、中国への空輸ルートを維持し、陸上補給路をビルマ北部へ開くことであった。東南アジア司令部の作戦はイギリスとアメリカの間に極めて厳しい議論を引き起こした。それは、司令部の頭文字である SEAC は「イギリスのアジアの植民地を救え」を意味するというアメリカの主張によって例示されている[8]。そこには多分に真実があり、アメリカはこの目的を必ずしも共有しなかった[9]。

東南アジアにおけるイギリス軍の兵士および装備の優先度は常に低かった。イギリスにとって、この地域で作戦を実施するにはインドで育成された部隊の助けがなければ不可能であったろう。東南アジア司令部配下の将兵 100 万人のうち、70 万人はインド人、10 万人はイギリス人、そして、約 9 万人はアフリカ東部と西部のイギリスの植民地から

---

[7] オーストラリアとアメリカの陸軍の戦力比は、David Horner, "Combined Operations in the Southwest Pacific: The Australian Army in MacArthur's Operations", in Judith L. Bellafaire, *The US Army and World War II: Selected Papers from the Army's Commemorative Conferences* (Washington DC: Center of Military History, United States Army, 1998)を参照。

[8] I. C. B. Dear (ed.), *The Oxford Companion to the Second World War* (Oxford: Oxford University Press, 1995), p. 1027.

[9] 太平洋における米英関係に関する草分け的な研究は、Christopher Thorne, *Allies of a Kind: The United States, Britain and the War Against Japan, 1941-1945* (London: Hamish Hamilton, 1978)である。

来た者であった。戦争中、約 17 個のインド師団が、マラヤに 2 個師団、ビルマに 11 個師団というようにインド以外で従軍した。

イギリスは空軍の比率が高かった。例えば、1943 年 12 月、東南アジア空軍司令部は応戦態勢にある飛行中隊を 67 個、有していた。そのうち 44 個はイギリス空軍からで、19 個はアメリカ航空部隊、2 個はインド帝国空軍で、カナダ空軍とオランダ空軍はそれぞれ 1 個ずつであった。

イギリス東洋艦隊はインド洋に展開していたが、1944 年までは強力な戦力ではなかった。43 年 11 月、それは戦艦 1 隻、護衛空母 1 隻、巡洋艦 7 隻、武装商船 2 隻、駆逐艦 11 隻、護衛艦 13 隻、潜水艦 6 隻から成っていた。

サー・ウィリアム・スリム将軍指揮下のイギリス第 14 軍は、1944 年初めまでビルマに進撃する準備が整っていなかった。その頃、日本は遅ればせながら、無分別なインド侵攻を試みようと行動を開始していた。日本の攻撃はそれまで停滞していた戦域を活性化させた。44 年前半にイギリス第 14 軍は日本の攻撃をインド国境で破った。大規模な戦闘がアラカン、コヒマ、インパールで繰り広げられた。日本にとって、それは悲惨な攻撃であった。進攻部隊 8 万 5000 人のうち、5 万 3000 人が負傷し、3 万人が戦死した。スリムにとってビルマ進撃への道は開けた[10]。

しかし、太平洋戦争は当時、極めて急速に展開しつつあり、イギリスの前進は戦略的に意味のないものとなる可能性が高かった。すでに「先にヒトラーを打ち負かす」という連合国の戦略に言及したが、概して、この戦略はカサブランカ、ワシントン、ケベックなど様々な場所で定期的に開かれたチャーチル、ルーズベルト、そして、両者の軍事上の助言者たちの間での一連の主要会議で確認された。しかし、1943 年末から 44 年にかけて、イギリスはアメリカ単独でも太平洋戦争に勝つことができると痛切に感じるようになった。従って、イギリスは太平洋戦争の戦後処理から外されると考えた。アメリカはすでに一部のイギリス領太平洋諸島を解放しており、イギリスは同地域に復帰して部隊を直接、日本に対して展開することが、政治的、軍事的に肝要であると見ていた。イギリスはその軍隊を用いてマラヤ、シンガポール、香港などの植民地を奪回することを決心していた。

チャーチルは太平洋でどうやってイギリスの努力を最大化するかという問題で、参謀本部との厳しい論争に加わるようになった。チャーチルはスマトラ侵攻を望んでいた。参謀たちはオーストラリア北部のダーウィンから北上して、東インドに突進することを

---

[10] ビルマにおける軍事行動に関する近年の有用な研究には、Louis Allen, *Burma: The Longest War, 1941-1945* (London: Weidenfeld and Nicolson, 2000)、Daniel Marston, *Phoenix from the Ashes: The Indian Army in the Burma Campaign* (London: Praeger, 2003)、そして、Jon Latimer, *Burma: The Forgotten War* (London: John Murray, 2004)がある。

主張した。こうして、マッカーサーの南西太平洋方面軍の左側を前進することが発令された。オーストラリア陸軍司令官サー・トーマス・ブラミー将軍は、この後者の戦略に興味を引かれ、新たな戦域で指揮を執ることを望み、オーストラリア軍が依然としてマッカーサーの指揮下にある場合、マッカーサーはオーストラリア軍を軽視するであろうことを危惧した。しかし、オーストラリアの首相ジョン・カーティンは彼の軍隊が稼働した状態でマッカーサーの指揮下にとどまることを欲した。

これらのイギリスの計画は複数の出来事によって取って代わられた。イギリスが新たな戦略を考案するやいなや、アメリカ先遣部隊はそれらを冗長なものにしてしまった。1943 年 11 月に始まるタラワへの上陸から、アメリカ海軍は中部太平洋を急速に前進し、44 年 6 月にはマリアナ諸島のサイパンを手中にした。これにより、アメリカは日本への空爆が可能になった。マッカーサーの動きも素早かった。44 年 9 月までに、彼はニューギニアの北岸に沿って前進し、ハルマヘラ諸島のモロタイに到達した。最終的に、イギリスは最善の道は日本に向かって前進する中で、アメリカ海軍と行動できる大規模艦隊を提供することであると悟った。

太平洋戦争の最後の年の形状、特にそこでの大英帝国の役割は、1944 年 9 月半ばおよび 10 月初めにケベックとワシントンでそれぞれ開かれた重要な会議で決定した。ケベックでは、チャーチル、ルーズベルト、そして、両者の参謀長が、マウントバッテンの東南アジア司令部がビルマに進撃することに合意した。その軍勢は最終的にマラヤに侵攻し、シンガポールを落とすことになっていた。しかし、アメリカは戦略爆撃とフィリピン南部のミンダナオ島への上陸を含む日本への攻撃のその他の部分を実施することになっていた。最終的に連合国は日本に侵攻せざるを得なくなり、ヨーロッパでの戦争が終われば、ソ連は満州に侵攻して、同地の大規模な日本陸軍を捕虜とするのである。

アメリカは同盟国から支援を得るかどうか決めかねていた。アメリカは日本を打ち負かすための努力への支援を快く受け入れたが、太平洋における戦後体制を掌握することをも欲していた。つまり、アメリカは同盟国に主要な役割を果たさせることには消極的であった。イギリスが除外されたのは、イギリス軍はインドに拠点があり、太平洋では容易に運用できなかったからである。チャーチルはビルマ攻撃にしばらく時間がかかることを承知しており、そのときまでにはアメリカは日本を占領してしまっているであろうことを予測していた。そういう訳で、太平洋でアメリカ海軍と作戦をともにする大規模艦隊を提供することを申し出たのである。アメリカはこの申し出を受け入れたが、どの程度素早くイギリス艦隊が集結・展開できるかは分からなかった。

次に、会議の中程で、ニミッツ提督はフィリピン中部には日本軍がほとんどいないと思われると報告した。結果として、9 月 15 日にアメリカ統合参謀本部は、10 月 20 日にマッカーサーの部隊がレイテ島に上陸することを承認した。ミンダナオ島への上陸は放

棄された。最終的に、10 月 3 日、ワシントンで、連合参謀本部はマッカーサーの部隊が 1944 年 12 月 20 日にルソン島へ進攻することに合意した。ニミッツの中部太平洋方面司令部は 1945 年 1 月末に硫黄島を落とし、3 月 1 日には沖縄に移動することになった。これらの作戦が発動されれば、イギリスは後方に取り残されて手持ち無沙汰となるであろう。

太平洋戦争の最後の年、大英帝国軍は三つの主要な作戦に加わった。ビルマにおける第 14 軍の作戦、ニューギニアおよびボルネオにおけるオーストラリア軍の作戦、そして、日本に接近するイギリス太平洋艦隊の作戦である。いずれも戦争の帰趨に影響するものではないように思われた。

1944 年 12 月に第 14 軍がビルマへ侵攻を開始したときまでに、アメリカ軍はすでにフィリピンにいた。それにもかかわらず、第 14 軍のビルマ作戦は 6 個師団によって実施され、投入兵力は 26 万人であり、華々しい成功を収めた。その部隊は日本陸軍 4 個師団を駆逐し、45 年 5 月にラングーンを攻略した。ビルマは解放され、イギリスのプライドは回復された。作戦は日本軍を釘づけにし、実際、他所に展開したかもしれない部隊を駆逐した。事実、第 14 軍は戦争における他のいかなる連合国の部隊よりも日本兵を多く殺害した。しかし、戦略的には、45 年のビルマ作戦は戦争の帰趨にほとんど影響を及ぼさなかった。イギリスがマラヤ侵攻を準備していたことは明らかであった。マウントバッテンの司令部の統制下、ジッパー作戦として知られる上陸作戦が、日本降伏後の 45 年 9 月に実施された。

オーストラリア軍の作戦は華々しさには欠けたが、より議論を呼ぶところである[11]。1942 年から 43 年にかけて、マッカーサーはオーストラリア陸軍に依存していたが、フィリピンで災難に遭遇しない限り、そこでオーストラリア師団を使うつもりはなかった。政治的および個人的理由で、アメリカ単独でフィリピンを解放するべきであると考えていた。それどころか、マッカーサーはオーストラリア軍の役割をニューギニア、ニューブリテン、ブーゲンビルの守備に格下げした。オーストラリア政府にはこの方針を変更するのに十分な影響力がなかった。ブラミー将軍はこの守備隊の役割に満足せず、当時、アメリカがフィリピン南部で行っていた攻撃と同じような方法で、ニューギニアとブーゲンビルで依然として抵抗している大規模な日本軍を掃討するための攻撃を開始した。ニミッツ提督の指揮下、アメリカ軍が 45 年 4 月 1 日に沖縄に上陸し、日本包囲網が狭まった後、それより南方で実施されていた作戦はすべて戦略意味がなかったという事実

[11] 1944 年から 45 年にかけてのオーストラリア軍の作戦については多数の文献があるが、少なくとも作戦の一部が正当化できるとした議論を含め、概略は David Horner, “The Final Campaigns of the Pacific War”, in Peter Dennis (ed.), *1945: War and Peace in the Pacific: Selected Essays* (Canberra: Australian War Memorial, 1999)を参照。

を巡って論争が繰り返されている。このような状況にあっても、マッカーサーはオーストラリア軍 2 個師団をボルネオの重要地点の攻略に派遣するのをやめず、45 年 5 月から 6 月にかけて、高度な技術による水陸両用作戦の後、実施された。

2007 年にマックス・ヘイスティングのベストセラー『ネメシス（*Nemesis*）』（アメリカでは『報復（*Retribution*）』というタイトル）が出版されているので、これらの作戦についてもう少し付け加えておく必要がある。1944 年から 45 年にかけてのオーストラリア軍の作戦に関する章のタイトルは「オーストラリア人の『膨れ（Bludging）』および『掃討（Mopping Up）』」となっている。オーストラリアでは「bludging」は怠けること、他人の努力で生計を立てることを意味する。ヘイスティングは「700 万の人々によって行われた限定的な軍事貢献」と述べている[12]。43 年の攻勢におけるオーストラリア軍 5 個師団の展開については前述したが、特に部隊をニューギニアへ輸送し、同地で極度に困難な熱帯の条件下、戦闘を行う部隊を支援することの苦労を考えると、軍事貢献が限定的であったなどとは、まず言えない。45 年 7 月、オーストラリアは戦争中におけるいかなる月よりも多くの歩兵師団（7 個師団のうち 6 個師団）を同時に行動させた。オーストラリアが重大な戦争への貢献として食糧その他の補給物資を太平洋のイギリス軍とアメリカ軍に供給し続けられるよう、他の師団は動員を解かれた。オーストラリアは連合国で唯一、ドイツ敗戦後、相対的に、それまで以上に軍隊を行動させていた。兵士の死傷に関しては、戦争中におけるオーストラリアの犠牲は人口と比較してほぼ平均的であった。総人口の比率で見ると、イギリスの戦死者はオーストラリアの約三倍で、アメリカはオーストラリアの約半分であった[13]。

過去 50 年にわたって、オーストラリア人歴史家の多くが指摘しているように、ヘイスティングはある意味で正しかった。戦争の最後の年、オーストラリア軍は確かにマッカーサーによって作戦の脇に追いやられていたが、それは戦争の帰趨には影響しなかった。さらに、オーストラリアにもはや侵攻される恐れのないことが明らかになると、オーストラリア市民の総力戦対策への関与は急速に消滅した。オーストラリアの民間人に死傷者が出ることはなかったし、ヨーロッパやアジアの他の諸国において見られたようなインフラストラクチャーの破壊もなかった。

イギリス太平洋艦隊はイギリス東インド艦隊から編成されていた。それは後から加えられた艦艇とともに、1945 年初めにオーストラリアへ向けて出港した。アメリカとの作

---

[12] Max Hastings, *Nemesis: The battle for Japan, 1944-45* (London: HarperPress, 2007), p. 366.

[13] John Robertson, *Australia at War 1939-1945* (Melbourne: William Heinemann, 1981), p. 213.

戦に備えるためであった[14]。戦艦 2 隻、空母 4 隻、巡洋艦 5 隻、駆逐艦 14 隻がその攻撃部隊の基幹であった。それは戦争中、最大かつ最強のイギリス艦隊であった。大部分の艦艇はイギリス所有で、わずかにカナダの艦艇も混じっていた。オーストラリアは駆逐艦 9 隻を提供した。それらは以前、インド洋での作戦に従事していたものである。そして、さらにコルベット艦を 10 隻以上、提供した。オーストラリアの艦艇、巡洋艦、駆逐艦、上陸用舟艇は 42 年以来、南西太平洋でアメリカ海軍とともに行動してきた。それらは終戦までアメリカの任務部隊のもとで任務を果たし続けた。イギリス太平洋艦隊の展開は、それまでイギリス海軍が必要としていなかった大規模な輜重艦隊を必要とした。

沖縄周辺の戦闘で、イギリス海軍任務部隊はアメリカ海軍と行動していたが、沖縄上陸作戦には直接、参加しなかった。オーストラリアで整備された後、同艦隊は戦争の最後の数日間、日本を攻撃するために復帰した。イギリスの規格からすれば、同艦隊は大規模であったが、アメリカが展開した海軍の規模と比べるとごく一部に過ぎず、戦争にはわずかな役にしか立たなかった。例えば、イギリス太平洋艦隊は沖縄戦に空母 4 隻を派遣しているが、アメリカ海軍は 40 隻であった。実際、ほどなくイギリスは、アメリカ海軍が航空作戦や陸上基地から長期間離れて行う作戦に遥かに熟達していることを知った。イギリス太平洋艦隊を展開する主な理由は、戦争が日本の敗戦に終わったとき、イギリスが依然として戦争に関わっていることを示すためであった。

終戦時、イギリスの司令官たちはマラヤ、シンガポール、香港で降伏した日本人を抑留し、イギリス人をかつての植民地に威厳とともに戻した。オーストラリアの司令官たちはオランダ領東インドやニューギニアだけでなく、かつてイギリスの植民地であったボルネオで降伏した日本軍将兵も捕虜とした。

戦後、イギリス連邦占領軍が編成され、日本占領を支援した。その司令官はオーストラリアの将軍で、占領軍はオーストラリア、イギリス、インド、ニュージーランドの軍隊から成っていた。

太平洋戦争における大英帝国の役割の別の側面をいくつか付け加えなければならない。「大英帝国の宝石」であるインドは重要な役割を担った。1941 年のインドの人口は 3 億 1800 万人であったが、発展途上であり、その住民は貧困に喘いでいた。面積は極めて広く、大量の工業製品と原料を提供するゆとりがあった。太平洋戦争の勃発によって戦時動員が加速され、経済は主としてビルマでの英印軍の作戦を支援する方向に向けられた。インドが総力戦に巻き込まれた要素はここにあった。

---

[14] イギリス太平洋艦隊については、W. O. C. Roberts, *British Pacific Fleet* (Sydney: Naval Historical Society of Australia, 1991)および Peter Smith, *Task Force 57: British Pacific Fleet, 1944-45* (London: Kimber,1969)を参照。

戦争は独立を一段と煽った。インド国民会議派のメンバーの中には、戦争をイギリスに圧力を加える好機と見た者がいれば、戦争努力を支援しはしたが、将来の独立を見据えていた者もいた。政府は散発的な暴動を鎮めるために軍隊を出動させなければならなかった。そうした混乱にもかかわらず、軍隊と軍需物資の供給を通じて、インドは戦争の遂行に大きく貢献した。それにもかかわらず、イギリスの統治が終戦後、長く続き得ないであろうことは明らかであった。

環太平洋地域の他の帝国の諸地域は太平洋戦争でほとんど役割を果たさなかった。香港で降伏したカナダ軍について先に述べたが、イギリス太平洋艦隊に加わったわずかな艦艇を除いて、カナダは太平洋戦争に十分に参加しているとは言えなかった。ニュージーランドの人口はわずか 160 万人で、ごく小規模の貢献しかなし得なかった。ニュージーランドはその強力な歩兵師団を中東に維持することを決定した。そこで師団は苦労の末、北アフリカとイタリアで手柄を立てた。この決定はニュージーランド、オーストラリア両政府間の関係を緊張させた。なぜなら、オーストラリアは太平洋での戦闘に不公平があると考えたからである。ニュージーランドの 2 個歩兵旅団、艦艇、航空機は、1942 年から 45 年までの間、ソロモン諸島で任務を果たした。

オーストラリアにとって、太平洋戦争は半世紀以上にわたって内政および外交政策に影響を及ぼした。1942 年の侵攻の脅威により、オーストラリアは大規模な移民受入計画を開始した。2008 年までに、約 650 万人がオーストラリアに移住した。これによってオーストラリアにかなりの人口拡大がもたらされ、700 万人から 2100 万人に増加したのである。オーストラリアは総力戦に組み込まれ、より長い期間にわたって、そこから利益を得たが、他の国々が被ったような恐ろしい破壊は免れたという特異な状況にあった。戦争中に貢献したということから、オーストラリアはアメリカの太平洋地域における重要な同盟国となった。オーストラリアと他のかつての大英帝国の一員は、もはや自らを大英帝国の一部とは考えていない。帝国の後継者、イギリス連邦は一つの政治的、軍事的ブロックとしては行動しない。

イギリスが太平洋戦争に参加したことから複数の結果が生じた。イギリスは 1941 年から 43 年にかけて屈辱を受けた。しかし、ビルマにおける困難な作戦とその成功、インド洋での作戦、限定的ながらアメリカ海軍とともに太平洋艦隊に参加したことを通じて、イギリスは東南アジアでの存在を再確立することができた。特に戦争の終盤、大英帝国はその領土すべてを回復したばかりでなく、リビア、マダガスカル、シチリア、シリアなど多くの領土を獲得し、統治したことから、版図は最大となった。さらに、英印軍はオランダ領東インドおよびフランス領インドシナに進駐した。それにもかかわらず、疑いなくアメリカは世界の超大国として疲弊したイギリスを凌駕していた。ほんの数年のうちに、非植民地化のプロセスは軌道に乗り、インドとビルマが最初に独立を達成し

た。1960 年代、イギリスは「スエズの東」から撤退する政策を開始した。香港が 1997 年に中国の施政下に戻ったとき、太平洋地域におけるイギリスの最後の植民地が消滅した。振り返ってみると、アジア太平洋地域における大英帝国の崩壊は、概ね、太平洋戦争によって加速されたと言うことができる。